

古代ギリシャ・クーロス像のアルカイクスマイル造形 に基づく仏像微笑表現の研究

Analysis on smile expressions of Buddhist statues in view of the archaic smile of ancient Greek kouros

○小林 茂樹¹⁾ 長田 典子²⁾
(¹⁾ 形相研究所、²⁾ 関西学院大学
E-mail: kobayashi@keisolabs.com

1. アルカイクスマイルは顔の表情

飛鳥期の法隆寺金堂中尊釈迦坐像や同寺夢殿救世観音立像は、いずれも口唇が顕著な口角上昇の形に造られた。白鳳期の中宮寺半迦思惟像の口唇も同様で、静的な顔全体の造形の中に刻された、ひとり動的な口唇が、不思議な表情との印象を与え(図2)、見た人々にさまざまな解釈や説明を誘発してきた。

ある人は、その不整合を「古拙な笑み」と形容して稚拙の範疇に投入したが、それは当惑を蔑視に置換したに過ぎない。また他の人は、古代ギリシャ・アルカイク期クーロス像を引き合いに、「アルカイクスマイル」様式が遙々日本にたどり着いたものと説明した。その説明は直感次元に止まり、古代ギリシャのクーロスと飛鳥期仏像の間に横たわる、茫々たる時間と空間を一気に飛躍したものであった。

私たちはここで、クーロスのアルカイクスマイルは、顔の表情を表現する造形であって、単に口角を上昇させた口唇造形を指すものではない、との仮説を設定し、この仮説のもとに、1世紀末から2世紀初にかけて、ガンダーラやマトゥラーで始まったとされる仏像の造像が、アジア各地域をそれぞれの時代を経てわが国に至る間の、口角上昇様式の変遷を辿り、それらを果たしてアルカイクスマイルと同類に見なしてよいか否か、について検討した。

2. クーロス像の表情の異様さ

(1) アルカイク期とクーロス: ギリシャアルカイク期(700~480 BC)のうち、600 BCころ以降、両腕を下ろして拳を握り、左脚を1歩前へ出した青年裸体の大理石立像が、ギリシャ本土、エーゲ海、小アジアに亘り、死者への追憶のために造られ、クーロス(kouros)と呼ばれている(図1左)。

(2) クーロス表情の異様さ: 全開の両眼は歩行する人に整合しないうえ、口角上昇の口唇とは一層不整合である(図1右)。しかし従来は、不整合の主因は全面的に上昇口角に負わせられ、全開の眼裂は刺激と

して不当にネグレクトされてきた。

私たちは、全開眼裂に口角上昇の口唇を組合せた造形が生む不自然さ、異様さこそ、死者への追憶を形而上の次元に導こうとしたクーロス彫刻家の意図が生み出した所産と推定した。

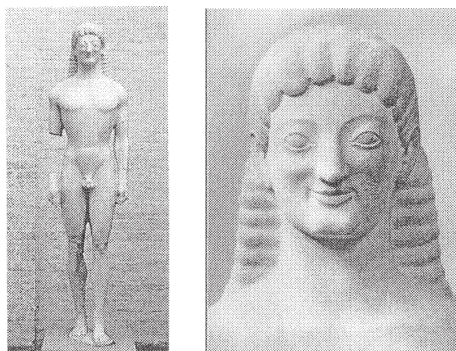


図1. Apollo of Tenea (560-550 BC)

3. 仏像の口角上昇造形は異様と言えない

私たちの仮説に基づけば、法隆寺金堂中尊像や中宮寺像の眼裂は半開に造形されているため、クーロスに見られる強烈な異様感をほとんど感じさせない。

私たちは、仏像の口唇微笑造形数量解析(本誌、11巻1号51頁、2011年)で対象とした諸像の口角上昇と眼裂造形の組合せを解析した。その結果、ごく一部を除き、仏像の口角上昇造形は全開眼裂を伴わず、従って、大多数の仏像の微笑表情はアルカイクスマイルとは言えないとの結論に到達した。

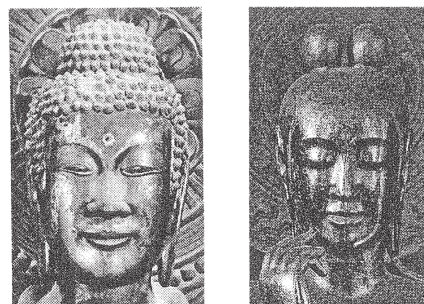


図2. 左: 法隆寺金堂中尊像
右: 中宮寺半迦思惟像